

木下順二が丸山学に送った書簡の紹介  
＝ハーンの英作文添削ガラス原版に触れて＝

平成17年11月初頭にある熊本の古書店から「木下順二書簡一便箋3枚1通・丸山学宛一」が店頭に出た。これは熊本大学が入手して現在付属図書館に展示されている。この書簡で意義深いのは、投函者が五高出身の劇作家木下順二であり、さらにこの書簡の中にハーンが松江時代に行なった英作文の授業で直接生徒に添削を加えた写真原版についての言及があるという点である。生徒の名前は大谷正信と田邊勝太郎である。実はこの二人と全く同人物の添削ガラス原版95枚が現在熊本県立図書館に所蔵されている。これは一時木下氏が保有し後に熊本小泉八雲旧居に納められたものである。

木下氏は自ら監修した丸山学著の『小泉八雲新考』の<解説>のところで、次のように述べておられる。

「私は未亡人からハーンの手紙を写したガラスの原版をたくさん頂いた。私蔵は意味がないと思って、もう十年以上も前になるだろうか、私はそれを熊本市の「小泉八雲旧居」というところに納めたが、これは赤星さんの例の家を近くの土地に移して修復した記念館である。」

ここで言う未亡人とは松江でハーンの生徒であった藤崎（旧姓小豆沢）八三郎氏の未亡人ヲトキさんのことである。つまりガラス原版は元々藤崎家にあったもののようである。そしてこの中にハーン添削の英作文の「ガラス原版」も含まれていたと考えられる。木下氏が熊本に納めたガラス原版はハーンが松江時代に教えた二人の生徒のものと同じであるからである。そうすると、元々ガラス原版をもっておられたのはヲトキさんということになる。確かに木下氏はハーンの英作文の添削ガラス原版をかなり保持しておられた時期があった。何かの機会にヲトキさんは木下氏にこれを託したものと思われる。藤崎家の家は白川の明午橋近くの新屋敷にあり、木下氏の熊本滞在時の家のすぐ近くにあった。おそらくは木下氏と藤崎家とは親しい交流があったものと思われる。

八雲会発行の機関誌『へるん』三号でかつてヲトキさんは次のように語っておられる。

「先生（ハーン先生）の絶筆であるお手紙は注意して身から離さぬように大事にしておりましたが、戦争中戦災の難に合い焼失してしまい残念でなりません。幸い木下順二さんが、前もって写真に撮ってあってその原版を東京の書店に預けてあるのを探して下され、それを焼き付けたものが今は手取本町の小泉八雲旧居（記念館）に納められてあることはせめてもの私のなぐさめとなります。」

ここで藤崎家にあったハーン関係の多くの原資料は戦争中戦災で焼失したことが伺える。ここで英作文添削の原物のうち十数枚が京都外国語大学附属図書館に現在保管されていることは記憶されていてよい。またヲトキさ

んから預かって戦災で消失する前に原版に撮るのに木下氏が大きな役割を果たしていたことがこれで伺える。

丸山学は実は木下氏に旧制中学で英語の手ほどきをした先生であった。木下氏は添削原版に触れてこの書簡を恩師の丸山先生に認めたのである。この全文を次に紹介しておきたい。

冠省 ご無沙汰して居ますが皆さんお変わりありませんか。

当方まず A どうやらやって居ます。藤崎氏の件、その後も大いに気にかいて居りましたが、先日ある関係から、日佛會館長のロベール氏という人が Hearn mania であることを知り、人を介して話してもらいましたところ未発表の手紙があるなら、場合によっては当會館から出版してもいいし云々という好条件の返答がありました。それから齋藤勇先生に御相談したところ、[これは又別途に]いろ A と具体的な方針について御意見を出して下さいました。ところが、そういうことなので喜んで、前から小生の所へ持って来てある例の写真原板を調べましたところ、八十八枚の全部が大谷氏、田部氏等の松江時代の作文で、たゞそれにハーンが添削の筆を加えて居るものに過ぎないものだったので大いに弱ってしまいました。尤もこんな事は、もっとずっと早く、ちょっと時間を作ってしらべておけば分かった筈の事なので、その点

(頁替)

怠慢の段何とも申しわけなく思っているのですが、小生藤崎氏から伺って居たところでは、あの原版の中に貴重な手紙や絶筆などもあった筈で、小生としてはそう理解して居たのか、あるいは他に(研究室か北星堂に)もっと原版がある筈なのでしょう。小生が研究室からもって来たのは(これが[研究室にある]全部だと思うのですが)多分キャビネという大きさだと思いますが、それが八十八枚あるのみです。右のこと、実は直接藤崎氏へ手紙を認めるべきですが、そして認めるつもりで居りますが、先生からもなるべく早い御ついでの時、お訊ねになってみて下さいませんか。

別便で戯曲をお送りします。三月二十九—四月十四日、三越劇場でやりました。新聞評は、大新聞はそろって好評でしたが、自分としては一年近く前の旧作で甚だ

(頁替)

あきたらず、舞台も大分イメージが違って、大いにショゲてしまいました。これから大阪・京都でやります。その事もあって、数[日]中にちょっと関西へ参ります。

右、とりあえず、御報告がてら

奥様ほか皆様によりしくお伝え下さいまし

勿々

四月十九日

木下順二

丸山先生

このことから木下氏自身は当初このハーンの英作文の添削原板に大きな意

義を置いていたわけではなさそうである。また文面から推してヲトキさんの語りに出てくる「東京の書店」とは北星堂書店であるに違いない。

本文に従って一年近く前の旧作で、東京（三越劇場）で3月に上演されたとされている木下氏の作品は「彦市ばなし」であろうか。この作品は昭和21年11月に<小天地>に発表され、昭和23年3月に上演されている。

次に、木下氏がこの書簡を出したのはY M C Aの東大青年會の寄宿舍からである。彼はここに戦争を挟んで昭和11年から昭和28年までの17年間滞在していた。また文面から推してこの書簡は藤崎八三郎氏ご存命中のものである。藤崎氏は昭和26年に他界されているのでこの書簡はそれ以前のものでなければならない。そこでここではこの書簡は昭和23年4月19日に投函されたものであると仮説しておきたい。

この書簡はかつて五高生であった劇作家木下順二の直筆であり、恩師丸山学に認めたものである。内容はハーンの英作文添削のガラス原版に関わり興味深いものがある。現在本学附属図書館内に展示されており一度ご覧になることをおすすめしたい。

西川盛雄（教育学部教授）